
お約束研究会

土曜日の朝刊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お約束研究会

【Zコード】

Z8265W

【作者名】

土曜日の朝刊

【あらすじ】

平凡でこれといった特徴もない、ありがちな設定の主人公の男子高校生。

ヒロインは主人公の幼馴染といつよくある設定。

友達は絵に描いたような優等生。

極めつけはクールで無口な無表情少女といふどこかで聞いたようなキャラ。

そんなお約束が服を着て歩いているような彼らが“お約束”について追求する！ 第四の壁？ なにそれおいしいの？

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想（前書き）

といいつつやつちゃんのが三流作家のサガです。
最初から見てもいいし後から設定思い出すために見てもいいです。

登場人物紹介なんて無くても読める小説が理想

佐倉 裕貴
さくら ゆうき

“お約束研究会”二人目の部員。

事なきれ主義で口癖は「やれやれ」。平凡で特にこれと言った特徴もとりえもない。……というありきたりなよくいる主人公。高校一年生。自分の設定のあまりの陳腐さにうんざりしている。

また、この小説のありがちなお約束を一番に嫌っている人物でもある。

吉村 美並
よしむら みなみ

“お約束研究会”一応部長。というか、研究会を作った張本人であり幼馴染である裕貴をこの研究会に引っ張り込んだのも彼女である。

ツインテールでツンデレ、貧乳である事を気にしているというありきたりな設定だが、本人はそれほど気にしていない。目標はお約束やありきたりのない究極の小説を完成させる事。

桐山 透
きりやま とおる

お約束研究会員で真面目で冷静で万能。ストイックな性格で成績も優秀。スポーツ万能。非の打ち所のないよくいる優等生キャラ。

野上 静香
のがみ しづか

最後の部員。無口で無表情などこかで聞いた事があるような設定の少女。たまに口を開けば的確で鋭い指摘をする。何を考えているのかわからない、端的に言えば長門ポジション。

プロローグの内容と設定を説明しようつか（前書き）

むしゃくしゃしてやりました。反省をしてません。

小説といつのもおじがましいです。ギャグ小説のつもりでやつたのがこのザマです。

でも読んでくれる人がいましたら、本当にありがとうございます。

プロローグの名のもとに設定を説明しようつか

こんなアホなタイトルにして釣られて読んでくれる人がいると思つたら大間違いだ

おれはそう言つたかたね。もちろんこの小説の作者に。
いまどきどんなに奇抜なタイトルにして読者の興味を惹こうとしあつて無駄だ。考える事はみんな一緒だからな。他にも似たようなタイトルがいくらでもあるわけだ。

「なにいきなり楽屋ネタかましてんのよ。つーか、あんたの愚痴つぽいモノローグなんて聞いてたら耳が腐り落ちるから話を進めてくれない」

「つるせーな。Jリヒ小説なんだよ」

なーんて、開始から数行田でいきなり文句を言つてくる生意氣なこの女。

おれの幼馴染であり、同級生である吉村美並よしむら みなみだ。

うわつ、出たよ幼馴染。なんつうありきたりな、なんて思わないで読んでくれよ。

おれだつて好きでこんな奴と幼馴染になつたんじゃないぞ。作者が低脳だから幼馴染以外に気のきいた設定を思いつかなかつただけだ。

少し赤みがかつた茶髪のツインテールをなびかせ、顔はヒロインなんだから当たり前だろと言わんばかりに可愛らしく、貧乳を気にする幼馴染少女。

吐き気がする程に陳腐な設定だと思わないか？

「美並の設定の説明終わった？」

「お前も“説明”とか言つたまじで頼むから。これ以上この小説に

樂屋ネタを増やしたらますます低脳呼ばわりされる」

「自分がさんざんやつておいてそれ？ いいのよ、プロローグなんてちょっととかつこよわげな名前だけど、結局は設定を説明するだけだから」

「なんちゅう事言つてんだよお前。おれが見たところ、プロローグは何種類かに分けられるぞ」

「へー、考えてんだね一応」

「まずお前が言つた“設定を説明する型”。これはファンタジーに多いから本来こうじう学園モノに使われる事はあんましないんだけど……そこは作者の頭が残念つて事で触れないでおくれ」

「他には？」

「あんま期待するような目をして訊かないでくれ。おれも適当に考えただけだから外れなんだ、こんなもんは。強いて言うなら、面白い話を先にやつちやう、つて感じのやつかな。うまく説明できないけど」

「よくわかんない」

「たとえばファンタジーだつたら、主人公が勇者になつた経緯やその他の登場人物との関係、世界観の説明、そういうのを全部すつとばして、まず勇者が敵をぶっ殺すシーンから始めるんだ。そこで読者を惹きつけて、一話から改めて設定を説明するパターン」

「ふーん、なるほどねえ……」

「あー、あとはミステリなんかだと、被害者のモノローグだつたりするよな。プロローグって。被害者が死ぬ前の生活がちょっとと描写されててさ。本編に入るとそいつは殺されたり」

「あー、あるある」

まあ、今まで言つたのは本当にぜーんぶ適当に言つただけだから、あんまり真に受けられても困るんだけどな。一気に喋つたから疲れたわ。

「なにほさつとしてんのよ。まだこの小説には説明しなきゃいけない設定がいつぱいあんでしょうが」

「つるつせーな。あんま説明説明連呼すんなよ。読んでもうえなくなるだろ。それとなく、自然に設定を説明するんだよ」「そもそもあんた、自分の名前すり混つてないじゃん」

申し遅れました、おれの名前は佐倉裕貴さくらひ ゆうきです。（これでいいんだろ）

多分読者は予想してるとと思うが、これといった長所も特技も特徴もない平凡な男子高校生……といつ設定。奔放なヒロインに振り回される苦労人……という設定。

ああ、うんざりだ、この陳腐すぎる設定。死んでもっと斬新なキヤラに転生したい。正直こうしてモノローグをやっているだけで恥ずかしいんだが。

タイトルを読めばわかると思うが、この物語の舞台となるのは……

「いやタイトル読んでもわかるわけないでしょ」「ちよ、つるせーよお前。モノローグに割り込んでくんな」

えー、失敬。タイトルを読めばわかると思うが、これは約束研究会のお話だ。

物語に出てくるお約束をひたすら追求して、お約束が出来るだけない究極の小説を追い求める研究会。それがお約束研究会だ。

色んな漫画やアニメや小説を読み漁った美並が、ありきたりに嫌気がさして衝動的につくつちました部だ。

おれは幼馴染だからか、強制的にここに入部せられて、部長はあいつ、副部長は一番目に入ったおれ、つて事になっている。

まあ、うちの高校は勝手に研究会も部もつくれないから、非公式だけど。部費も必要ないし、教室も余ってるし、誰にも迷惑かけてないし、そもそも大した活動じゃないしな。

要するに……大丈夫だ、問題ない。

つて事だ。設定的には、一番いい設定を頼む、つて話だが。妙な部活あるいは研究会をつくつてそこで活動する話、なんてのはそれこそ、うなる程あるわけだ。それが作者にはわかつてゐるのかね？

「さつげなく舞台が“高校”つて事をアピールしたわね」「いへこつせりげなさが重要なんだよ」

もつとも説明説明連呼しきやつたからには半遅れ感が半端じやないが。

「ねだといひこのよ」

こちいち文句が多いなこいつ。あんま固い事言わないで欲しい。しょせん“小説家になろう”のマイナー作家の書く小説のクオリティなんてこんなもんなんだよ。

上質な物語が読みたければ小説を買えばいいじゃん、ただし赤川郎や山田 介は除くが。

「あんた赤川さんティスつてんの？」

「だつてあれば……下手なライトノベルよりライトだと思つた」

「別にエルだらうがライトだらうが面白ければいいでしょ。山田介みたいに面白くもないのにライトなのはマズいけど……」「ライトといつより日本語じゃな……おや、誰か来たようだ」

「句点の使い方のお話。」

美並みなみが家から部室に無断で持ち込んだノートパソコンを食い入る
ように睨み付けている。

「どうかそれ、あれなんですけどね。

「ノートパソコンをそんなに睨みつけてもバナナは出てこないぞ」「
わかつとるわ。ていうかあたしバナナが好きだなんて言つてない
し!」

「なんか好きそうな顔して……」

言いつ切る前に奴の右フックがあれの顔面を襲つた。
この女相手に調子にのつて軽口を叩きやすくなるといつなる事は長年
の付き合いからわかつてたはずなのになあ。

「で、なにを見てたんだよ。おれのパソコンにBISHOUJO画像とか保
存したりしないでくれよ」

「んな事してないわよ。あたしはインターネットよりも生の本で…
つてそういう事じゃなくてね。小説家になろうってサイトで人気
の小説を読んでたのよ」

「はあん、そなんだ。どうよ、面白かったか」

「それが全然面白くないんだこれが。つてのは言いつぎだとしても、
ランキング上位の小説を読んでるとどうも既視感がある
「ありきたりだつて言いたいわけか」
「身もふたもない言い方をするとそいつの」

そもそもこの研究会 자체、ありきたりとお約束を研究するための
会だからなあ。“なるべく”のランディング上位の小説を読んでおくれ
はいい事かもしない。

「けど美並よ。“ありきたり”な事と“王道”な事は似て非なるもんだ。ありきたりな物語は見てて面白くもなんともないけど、王道でも面白い物語はあるんだぜ。漫画だと、ダイの大冒険とかわ」「そりやそーよ。でも、なるつの……いや、ネット小説の人気作品つてやっぱりありきたりだよ」

「まあな」

「作者が必死に奇をてらおうとしてるトコがむしろ痛々しいの。『ほづら、こんな斬新な設定は誰も思いつかないだろ』っていう意図が透けて見えるつていうか」

「で、考える事はみんな一緒だつたりして、結局ありきたりになるつて話だろ？ そつなるぐらいなら最初から王道をつっぱしつたほうがいいよな」

そんな話をしていたら、部室のドアが乾いた音を立てて開いた。そこから顔を出したのは、爽やかな黒髪の短髪に銀縁の眼鏡をかけた忌むべき……もとい羨ましい限りなイケメンで、この小説の優等生キャラ担当である男子生徒、桐山透きりやまとうだ。

「遅れすぎない。HRが長引いたんだ。」

「ああ、気にしないでいい。言つてるだろ？ 每日無理して来る事ないつて。」こべツに大した活動してるわけじゃないからな。単に放課後、家に帰るのも嫌だけどダラダラしたいつて思つて美並がつくつた研究会だから

「その割に君は随分熱心に活動しているように見えるが。」

「まー、一応な。でもお前は塾とかも忙しいだらうし、こんなくだらない事に付き合わせるのも申し訳なくてよ」

「ちょっとー、くだらないとは何よくだらないとは。あたしはこの研究会で研究した事をもとに、究極の小説を書いて文芸部の連中の度肝を抜く事が夢なんだから」

美並がクチをはさんでくる。なんだよ、究極の小説つて。あほか
こいつ。

「それより、何の話をしていたんだ？ 教えてくれよ。」

「“小説家になろう”ってサイトのランギング上位の小説はありき
たりな設定の小説が多いって話よ」

「ありきたり……言われてみればそうかもしれない。似たような設
定の小説が、他にいくらでもありそうなものばかりが上位にあるよ
うに感じる。」

「でっしょー？ でもね、多分上位の人をありきたり呼ばわりする
のは可哀想だと思うの。だって、上位の人がありきたりに見えるの
は、それを真似した人たちがいっぱい出てきたからで、結果上位の
人みたいな設定の小説があふれかえったのよ」

「……なるほど。流石は部長だ、しつかり考えている。」

桐山はそう言つて部長である美並に感心していた。そして、その後も自分なりに意見を出してみようとしたのか、立つたまま腕を組
んで考え込んでいる。

彼はおれが「まあ、かけるよ」と声をかけて、やっと椅子に座つ
た。

何事にも真剣に取り組んでくれる人の良い奴だ、彼は。多分“超
”が百回はつくほど真面目な人だ。

成績は学年の人数が二百五十人近くいるこの学校でも常に十位以
内は確実にキープしていて、三位以内に食い込む事だつて少なくな
い。その上、近所の道場に通つてている生糀の剣道家。

誠実すぎる性格からか、近寄りがたい雰囲気を身にまとい、クラ
スから浮いてしまうのがタマにキズ。

ここまでテンプレ

よくもまあ作者もここまでステレオタイプな優等生キャラな設定

にしたもんだ。学園モノの物語だつたらこんなキャラは吐いて捨てる程いるつての。低脳を通り越して無能だよ作者は。

「どうした佐倉。顔色が優れないが。」

「いや、何でもない……それより、前々から気になつてたんだけど桐山に訊きたい事があるんだ」

「訊きたいこと?」

そう、それはおれが彼がこの小説で発言してからずつと気になつていた事だ。明らかにこいつが、この二人の中で浮いている“違和感”。それは……

「桐山。どうしてお前のセリフだけカギカッコの最後に句点があるんだ?」

「句点? 僕のセリフの最後に句点があるのか。」

「言つてるそばからつけてるじゃん! 普通つけないもんだぞ」

「あー、そういうえば桐山くん、いつも句点つけてるね!」

今まで気がついてなかつたのか、こいつ。めざとく読者は多分桐山がセリフを言つた瞬間気がついたんだろうよ。

最近の小説はカギカッコの最後には句点をつけないのがメジャーだからな。いまどき「H.R.が長引いたんだ。」なんて、ちょっと見ただけでも軽く違和感を感じる。それがネット小説ならなおさらだ。

桐山は手を口メカミにやり、指でとんとん頭を叩き始めた。彼が考え方をするときの癖だ。

「確かに最初は句点をつけるのは今や不自然じゃないかと思つていたんだ。でも俺は小学校の頃はカギカッコの最後には句点をつけるのが正しいのだと習つたし、昔の文豪の小説には句点はついてる。だから、句点をつける事にしたんだ。」

「うーん、言われてみれば確かにあれもそう留つたな。何故か今的小説家はみんなつけないけど」

しかし小学校の頃に習つた決まりを今でも貫き通すとは流石堅物真面目優等生キャラ。

律儀つつか、融通が利かないといつ。

美並が突然机に両手をついて身を乗り出して言つた。

「つて、じゃあ句点をつけるのは間違いじゃないってわけつ？」

「うん。今はつけないのがメジャーってだけで、別に間違いといつワケではないんだ。」

「そ、そつだつたの……」

がつくし、とこゝ音が聞こえてきそうな程に肩を落とした美並は、ため息をつきながら席についた。

「なんだ、何か句点の事でトラウマでもあんのか？」

「いやね……前に“小説家になろう”に小説を投稿してみた事があるんだけどさ。」

「いきなり取つてつけたように句点つけなくていいぞ」

「はいはいわかったわよ。で、感想が欲しいからYahoo!の知恵袋に投稿した小説のURLを載せてアドバイスとかもらおうと思つたわけよ。したら、なんて回答がきたと思つ?」

「あつ……もしかして」

「そう。その回答者、自信満々に『まず小説を書く際の基本的なルールが出来ていません。カギカッコの最後には句点はつけませんよ』だなんて言つたのよ。あたし、その回答みて軽くショックだったのに

「ああ……いるよな、間違つた事をドヤ顔で回答する回答者は、特に小説のカテゴリーに多い」

まあ、ドヤ顔かどうかはネットだからわからないんだけど、絶対ドヤ顔だろこいつ、って回答があるんだよこれが。

「その回答者のマイページ見てみたら、『小説についてのアドバイスを中心ご回答しています』だなんてあつてさ。そいつの他の回答見てみたら『知恵袋に小説のアドバイスを求める人には面白い共通点があります。それは、初步的な文章のルールが出来ていらないものがあまりにも多すぎる事です。あなたの小説もそうですね』だつて！ 許せるとと思つ？」

「殺してやりたいね。まるで自分が小説を書く人の中で一番偉いんだあ、って言われてるみたいで」

そんなこんなで、話題はいつの間にか yahoo 知恵袋愚痴にシフトしていた。あれ？ いいのか？

「そういうばあ何の話してたんだっけ？」
「忘れた」

何で異世界ファンタジー小説が多いんだらうね（前書き）

前回から間が空いてこらぬようですが、基本こんなマイペース更新になると思います。

何で異世界ファンタジー小説が多いんだろうね

美並とyaho--！知恵袋の悪質な釣り質問に対する愚痴で盛り上がつてたとき、がらんと教室のドアが開いた。

しつとりとした黒髪のショートカットの小柄な女子が顔を覗かせた。無表情で。ここ重要。

彼女は眉ひとつ動かさずに部室の扉を閉め、最小限の無駄のない動きで空いている椅子にちょこんと座つた。

四人目のもとい最後の部員である野上静香のがみ しづかが入ってきたのだ。

「…………」

無言である。

さあ、ここまで言えれば察しの良い読者はお気付きだい。そう、彼女はこの小説の無口無表情クーデレ要員であり、長門 希ポジションである！

作者の独創性の無さといったらもう、そろそろ著作権侵害で訴えられてもいいんじゃないか、つてくらいだろ、おい。

この小説の登場人物で誰か一人でもステレオタイプじゃないキャラがいたか！？ オレを含めて。

まあそれはそうと、彼女が来たことでこの部室も静まつた。というか、ただおれと美並が黙つただけなんだが、それがキッカケで思い出した。

yaho--知恵袋の話とか句点の話とかですっかり忘れていたが、“小説家になろう”のあたり小説の話をしていたんじゃなかつたつけ？

「やつよー、その話をしてたのよ」

美並が叫ぶ。お前のせいで忘れてたんだよ。

「具体的にありきたりな設定つてこうのはどうこうものがあるんだ。

「うーん……」

正直この小説の設定こそありきたりの中のありきたりだと思つが
……それは言つちゃいけないんだろうな。

「裕貴はどう思つ?」

美並がおれにふつてきた。ありきたりな設定ねえ……言われば
「そつそつ」ってなるけど、訊かれると意外と出てこない。

考えてもよくわからんので美並からパソコンを奪い返して、ラン
キング上位の小説を読む。

うーん。美並の言つとおりの既視感……。

しかし、ランキング上位の小説と中堅あたりの小説を比べると、
上位の小説には“王道”、中堅は“ありきたり”な印象を受ける。
上位にも陳腐な設定もあるが、きちんと王道を行くものが多い。
まづいのは中堅あたりだらう。下手に奇をてらうあまり王道から
も外れ、その上結局は他に同じ考えの人が多くて邪道にもなりき
れず、ただ“ありきたり”なだけの設定が多い。

ま、おれらに言われたくないだらうが。

ふと気がつくと後ろに野上が立つていた。気配もなく後ろに立つ
なよなあ……びっくりするから。なんて思いながら振り返るおれに
は目もくれず、ノートパソコンの小説を見つめている。

「…………」

無言。こぐらぎ門ポジションでも、登場シーンから一言も喋つて

ないつて勘弁してほしい。

「何か気がついた事でもあるのか?」

「……異世界モノのファンタジーが多い」

「え? ……あつ」

言われてみればランキング上位の小説はファンタジー一色。って
いうか、そもそも連載されている小説はほとんどファンタジーじゃ
ないか。

「言われてみればたしかにそうだな。」

「うん、たしかに! ファンタジーばかりね!」

ははあ……どうりでこの超ありきたり小説の設定が“なるべ”の
上位小説には少ないはずだ。

これはたしかに陳腐極まりないアホ小説だが、ファンタジーでは
ないからな。

「って、何でファンタジーが多いんだ?」と思わず誰へとでもなく
疑問を投げかけたおれに

「多分、異世界ファンタジーモノは自分で世界観を作る事が出来る
からだと思う。」と桐山が応えてくれた。

「えつ、どうこう」と?」

「例えばミステリーを書こうと思えば、当然舞台となる場所を調べ
ておく必要がある。警察小説にするなら警察の事をよく調べておか
ないと物語は作れない。

スポーツがメインになるならその協議について調べて知っておく
必要があるし、SFを書くなら物理や化学に長けていなければ難し
い。」

……一理ある。なんか遠まわしでわかりにくいが、異世界ファンタジーなら今桐山が言つた面倒な点は全て無視できる。

世界観も細かいルールも全部自分で決める事ができるし、こぞとなれば“実はそういう設定だったのだよ！”で全部すむ。

問題といえば元となる設定がない為に自分で全てを創らなければならぬ所だが、“小説家になろう”を含め、この世界にはテンプレとなる異世界ファンタジーは山ほどある。自分が出来そうな設定だけあちこちから拾つてくる事も可能なワケだ。

最悪、“ここはよくある剣と魔法のファンタジーの世界だ”の一言で設定の説明を済ませる事だつて出来なくはない。

そもそも異世界ファンタジーというだけで、誰しもがまずありふれたテンプレな世界観　　例えばドラゴンクエストの世界のような　　を想像するから、そもそもちやんとした説明をする必要はなかつたりするのだ。

説明をしなければしないほど無理なく後付け設定をやりやすくなる。先の設定と矛盾する事を防げるからだ。

もちろんちやんとした作家が書いたファンタジーはきちんと手抜きをする事なく世界観を読者に伝えるので異世界ファンタジーそのものを否定はしない。斬新で面白い世界観にする作家、設定自体はありふれても描写を丁寧にして世界観を読者に近く感じさせてくれる作家、王道を進みながらも感動できる熱いストーリー展開をさせてくれる作家、と様々だ。

が、手を抜こうと思えばいくらでも手を抜けるジャンル、それが異世界ファンタジーなのである

「モノローグが長くて飽きるからこりでカットするわね」

「ちよ……せつかくおれが必死に異世界ファンタジーについて熱く語つてたのに！」

「だ・か・ら！　モノローグじゃ伝わらないでしょ！」

「読者には伝わるからいいんだよ」

「読者に元一などうでもいい事伝えてどーすんのー。」

やれやれ……あつ、しまつたこれは禁句だった。ただでさえ陳腐な設定のおれが“やれやれ”なんて口走つたらますますテンプレ通りのラノベ主人公になつてしまつ。

「つて、ちょっと待てよ。」

「ん? どうした?」

「さつきからずっとこの小説のありきたりさを心配しているが……この小説は異世界ファンタジーではないのだから、少なくとも“小説家になろう”ではあつたりの部類には入らないのではないか、と思つてな。」

「やーいえばそうね! やつよー、勇貴は馬鹿みたいに神経質になつてゐるけど、そこまで心配する事はないなじゃないかしぃり」

「何を言つたと思えば……」じつらまんでわかつてないな。

「誰が何と言おうとこの小説の設定は陳腐極まりないありきたり小説だ。それは間違いない」

「そう? でも異世界ファンタジーではないわけだしや……」

「美並、たしかに“なるう”では異世界ファンタジーはメジャーなジャンルさ。でも異世界ファンタジーに次ぐメジャーなジャンルといえば、何だかわかるか?」

「えつ? ……うーん……なんだる……」

桐山の方を向くと、少し頭を傾けて考えていたがすぐに思いついたようだつた。

野上といえば何を考えているのか、もしくは何も考えていないのか、眉ひとつ動かさずにひたすら沈黙を決め込んでいる。作者は会話文ばかりで場面の描写は真面目にやる気ないんだから喋らないと

空気になるよ、と教えてやりたい。

「学園モノ、って言いたいんだろう? 佐倉は。」

「流石優等生キャラ、わかつてゐるな」

「学園モノ? ふーん、そいえばそつかー……」

「そう、学園モノだよ。何で学園モノが流行るかわかるだろ? これまでの話を聞いてれば」

「これでわからない、と言われたら誰のためにこんな馬鹿げた研究会に律儀に毎日行ってやつてゐるのかわからなくなる。」

しかし美並もわかつたらしい。彼女はミステリを読みながら名探偵より先に答えを見つけたような顔で言つた。

「学園モノ。つまり、登場人物は学生になるのね。学生と言えばよほどの事がない限りは誰しもが必ず通る道であり、小説を綴りながら感情移入もしやすい。」

しかも自分の母校もしくは現在通つてている学校をモデルにすればいいから、警察小説とかのジャンルみたいに調べたり取材したりする必要もない。人生経験の少ない学生でも簡単に書く事が出来るし

ね。

学校つてのは特殊な場所だから“学園モノ”つてジャンルの出来事は学内で済む……つまり作者の経験内で書ける事が多い。それがメジャーな理由、でしょ!」

「よくできました」

つまり何が言いたいか、ってわかるだろ?

作者は相変わらずの低脳、ほんくら野郎つて事、さ。

設定の説明ばかりじゃ飽きたみや。話を進めりよ。

お約束研究会が部室だと言い張つてゐる空き教室でしばし“お約束談義”をしていたおれたちだが、そろそろ外も暗くなつてきました気がする。壁にかかっている時計を見ると、そろそろ最終下校時刻だつた。

この学校の最終下校時刻は今の時期は六時半という事だつた。冬時間なら六時だが、幸か不幸か今は六月だ。六月？季節外れな小說だな、とか言つてはいけない。そもそも作者がこれを書こうと思つたのは実をいうとその頃なのだ。筆が遅すぎるつて。

最終下校時刻は六時半だがクラブ活動で顧問が認めた場合はこの限りではない。が、お約束研究会は部ではない。当然顧問もいなし、そもそも研究会どころかおれら四人が勝手に集まつてダベつているのを研究会だと言い張つていいだけなのだ。

部長である美並に「そろそろ帰らうぜ」と声をかけ、鞄を肩にかけて立ち上がつた。

「そうね……でも何かまだ帰りたくないなあ。今日は」「あん？」

美並や一人も鞄をかけて、帰る準備を始めていた。桐山が電気を消してくれて下駄箱に向かつているときに美並が言つた。

「ねえ、この後みんなでマックでも寄つてかない？」
「はあ？」

下駄箱で靴を履き替えて帰る気満々だつたおれは陰鬱な気分になつた。

おれは早く帰つて執筆中の小説を書き上げたいんだが……なんて

言つても聞かないんだろうな、ここに。割とガチで書いてる“ノベリスト”つてタイトル学園小説なんだけどなあ。……。

「みんなはどうだ?」と一応野上と桐山にも意見を求めた。

「あ、別にただ単に飯を食べに行くわけじゃないんだからね! あれよ、最終下校時刻だから仕方なく場所を変えるけど、これは研究会の活動よ。やつと話がのつてきただつてこうのに……ねつ」

美並が媚びるように揉み手で一人に言つた。正直こいつはただ家に帰りたくないだけだろうとは思つたがあまりにも必死なので、ちよつと氣の毒に思つてしまつた自分が情けない。

「静香ちゃん、いい?」

と、野上に同意を求める美並。だから爾の日の捨て犬みたいな日やめりよ。

野上は「うん」と感情のこもつていらない声で短く答えると、また沈黙した。感情がこもつていないと言つても決して“本当は嫌なのに”という意味ではなく、そもそも彼女の声に感情がこもる事がないのだった。

時々彼女は何者なのだろうかと思つ。まさかこの独創性のカケラもない小説とはいえ宇宙人制のヒューマノイドなんて設定にすることは思えないし。

「桐山は? いいのか?」

「研究会の活動の延長というのなら俺は構わないよ。ううむ」

あいだ中間試験も終わつたしな。

「わっすが! こんな熱心な部員を持つて、あたしは誇りに思つわ

!」

桐山はちょっと律儀すぎるぞお前。研究会の活動つて言つたってただダベつているだけじゃないか。

「で、どうすんの？ 後はあんただけなんだけど」

と、おれの方を指差してにやにや笑つてゐる。一人を味方につけてさぞやご満悦のようだが、味方なんていようといまいと、おれに拒否権があつた事なんて幼馴染だつた経験から言わせてもらえば、ない。

「わかつたよ。でもあいにく金なんて今ほとんどないぞ」

「言いだしつぺはあたしだしね、ここはみんなの分は奢つてあげる！ あ、でも一人二百円までね」

セコいんだか太つ腹なんだかわかりにくいが、こいつは小遣いには大して不自由していらないのだ。

なにせ父親が今売れつ子の小説家なんだからな。吉村純一といえば、多少でも読書をする人間なら誰しもが知つてゐるはずだ。

本格推理、学園青春、SFなど幅広い範囲のジャンルで活躍し、特に彼の本格推理小説はまさに“本格”的にふさわしい正統派ミステリで、ミステリ愛好家からの評価も高い。

せつかくなんでこの際美並んちの身の上を説明する事にしよう。嫌な事はまとめて終わらせるに限る。

前述した通り吉村純一は今大人気の小説家であり彼女はその一人娘である。母親は彼女が幼い頃に病氣で他界した。それ以来は美並と父親である純一は一人暮らしであるが、純一は母親が生きていた頃も小説の執筆活動が忙しくあまり美並に構つてやる事がなかつたといつ。

そのせいか父娘の関係は必然的に冷え切つたものになつていき、

美並自身父親に良い印象を抱いてはいなによつだつた。美並は父親が自宅以外で執筆活動をする事が多く、家を空ける事も多い。

そんな美並が父親しかいない家に帰りたがらないのも当然といえば当然なのがもしけない。

と、またしてもありきたり設定乙。漫画とかラノベ主人公のヒロインの両親が死んでたり行方不明だつたりするパターンが多すぎ。実際そんな家庭がたくさんあるわけがないというのにだ。いかにラノベが現実を蔑ろにしているかがわかる。

文句のひとつでも言つてやるつかと思つていた矢先にマックにたどり着いた。

この時間帯はおれらみたいに学校帰りに寄つてく学生や、そもそも学校に行くつもりのないヤンキーなのでそれなりに混んでいる。注文は美並と桐山に任せて、おれと野上は席をとつておく事にした。

「裕貴何にすんの?」

「あー、えー、じゃあシコイクで」

「静香ちゃんは?」

「……私も」

そういう残すと、おれと野上は一階にある席に陣取つた。……はいいが、そういうえばおれと野上が一人で話す事なんてないぞ、気まずすぎる。

「……」

もつとも野上はそんな気まずさをおれと共有するつもりは毛頭ない、と言わんばかりに無口無表情長門ポジションキャラの設定を忠実に守つてゐる。

そもそも彼女はなぜこんな意味不明な研究会に籍を置いてくれて

いるのだろうか。

単に作者が無口キャラが欲しかった、ってだけの理由じゃないだろ。流石に。

だいたい彼女は何者なんだ。普通は宇宙人でもない限りここまで無口無表情って事はないぞ。実際。そんな女の子がいるのはライトノベルの世界だけだ。どんなに無口な女子だって、仲の良い女の子と話すときはそれなりに話すし、表情だつてそれなりには変わるはずなんだ。

流石にここまで無口無表情だと現実世界にいると「ミコ障呼ばわりされるレベルだろ。そちらへのリアリティもこの小説にも欠如している。作者はやはりボンクラなんだろうな。

つーかやっぱって、ただ設定説明してるだけでもう三千字近い。作者がそろそろ飽きる頃だぞこれ。今回だけ長くなつても不自然だし。

「ん、お待たせ」

と言つて、お盆を持つた美並と桐山が席に来た。

注文した通りおれと野上はシェイクで桐山がコーヒー。美並は…海老フイレオセット？

「そんなにがつづり食つのか」

「いーのよ。どうせ帰つても口クな晩御飯が用意されてるワケじやないんだから」

投げやりな表情で吐き捨てる美並を見て、おれはまた陰鬱な気分になる。

と、美並が顔を近づけて来て、小声で言つた。

「……そんな事より、ここまで来る間に小説の設定を説明するだけ

したんでしょう？」「

何を言つたと思えば、またそういうメタ発言か。モノローグでならともかく発言にすると敷能るや。

「したよ」と短く答えて手元のシェイクを啜つた。甘つたるい味が舌に広がり、喉を通り抜ける。これでは余計に喉が渴く。ウーロン茶にしどけばよかつたかな。

「ちよつと疑問に思つたんだが。」

桐山が「コーヒーを置いて言つた。最後に句点がつくからこいつが喋つたときは一発でわかるなこれ。

「今回は大した進展も会話もなく、ひたすら設定を説明するばかりだったよな。これでは駄作と言われるのではないかと心配になつてな。」

「安心しろ、この小説は駄作だから胸をはれ！　聞いてたかよ、今までの陳腐な設定を」

「設定の陳腐さはとりあえず置いておいて、だ。小説というものは設定を説明すればいいというものではない。スピードィーに話を進めて展開して膨らまさなければ読者は飽きる。小説の鉄則、と言つてもいい。」

言われてみれば、その通りだ。そういえば過去におれの小説の批評で言われた事がある。会話中心にスピードィーに話を進め、読者を飽きさせずに読ませ続けるようにしろ、小説は物語であつて設定の説明じゃない

「美並はどう思つ」

「そうね……斬新な設定ならまだしも、この小説の設定を説明され

るのって苦痛極まりないだろ？」

お前それを言つなよ……そういう話じゃないし。

「だから設定の説明は程々にした方がいいと思う。」

「でも納得がいかねえんだ」

ああそうさ、今回は最初から最後まで設定の説明会だよ。でもそれの何が駄目なのさ……？

「…………」

野上は依然黙つたまま。じうしてたまに目を向けてやらないと絶対に物語からフェードアウトするつて、お前。

「おれはこれでも、人並み程かは分からんがそれなりには本を読んできた。設定の説明ばかりの話だつてあつたし、それでも読み進めた！ 何が悪いんだよ！」

「何をそんな憤つてるのよ、あんたは」

「例えば、どんな小説を読んでいたんだ？」

「例えば？ そうだな……たとえば推理小説なんかには説明ばかりだろ。現場、トリックの説明はいいとして、人物の生き立ちや性格まで説明する作品だつてあるさ。有栖川有栖の作品とかそういうじゃないか？」

「火村英生、か。俺も少しなら読んだ事がある。」

「あたしはないかなあ、知つてるけど」

「野上は？」

「ある」

結構知つてゐるじゃないか。まあ結構有名だもんな、あの人も。有

栖川も好きだが正直言つて綾辻行人がさらに好き、でもあの人には有栖川ほど説明説明じゃないから黙つておくか。

「有栖川がどうかしたのかい。」

「ま、この流れでいけばわかると思うが……その人も割と設定の説明的シーンは多いぜ。ある時は、‘～の経歴と人物を少し述べておこう’みたいな感じで説明宣言する事すらある。

何が言いたいかわかるな？ つまり、有栖川みたいにそれなりに名が売れている人でさえ設定の説明は当たり前にやるんだよ。文句言われる筋合いなんてないってわけだ」

そこそこ説得力あるんじゃないのか、と自惚れながら思いながら熱弁を振るつた。そもそも推理小説は推理を楽しむものだから設定の説明なんざ何ら問題にはならないじゃんか当たり前なんだが、えて言わないでおこう。

「そうね！ 気にしないでも問題ないんじゃないから」「いや待て。そう簡単に決め付けていいのか。」

「妙に引っかかるな、桐山」

「たしかにそうさ、設定の説明があくとも読める小説は読める……が、ネット小説ならどうだろ？」「

「どういう意味だ？」

「本で読むなら楽な姿勢で集中して読めるし、しおりを挟んで少しずつ読める。が、ネット小説は違うんじゃないかと思うんだ。」

「あつ、そうか。ずっとモニターの文字ばかりを追つて読む作業は普通に本を読むよりも疲れるのよね。ただでさえ読むのが疲れるネット小説で説明ばかりじゃ飽きられる。そういう事ね、桐山くん？」

「ああ、そうだ。」

残念ながら反論の言葉が思い浮かばない。
つまりどういう事か、つて説明ばかりの今回は最後まで読んでも
うえないつて事さ。

ミステリ編、突入！（前書き）

今回からミステリーのお約束論がテーマになる予定です。

ミステリ編、突入！

「つて、タイトルがいきなり意味不明だよ説明しろよ」

「そう言つておれは部室の机を叩く。ミステリ編つて何？ ナメてるの？」

「まあ、落ち着きなさいよ裕貴。作者も淡々とお約束談義してるだけのこの小説の嫌気が差したのよ。今回からはミステリ風味な作品になるらしいの」

「そつかそつか作者はミステリがやりたいのか、じゃあ今からおれが作者を殺しに行くから自殺つてオチでこの小説を完結させようじやないか。」

「いきなりミステリ編？ ぶつ殺されたいの？」

「野上もおかしいと思うだろ？ いきなりミステリー編に入るなんて」「…………」

「と、部室の隅つこでジョン・ディクソン・カーを読みながら相変わらず無口キャラに忠実な野上。」

「何を考えているのかわからぬし、お前前回も完全に空氣だつたんだからマジで発言してくれ、頼む。」

「でもディクソン・カーを読んでいる時点でその氣は満々なのかもしないと思つた。ディクソン・カーといえば知る人ぞ知る推理小説作家で、特に密室モノが得意な巨匠だからな。」

「おれは実を言うとあまり好きじゃないんだけどな。海外ミステリ作家といえばおれはスー・グラフトン……」

「はい、誰も聞いてないからね！ そんな事より、ミステリ編って言つからには何か事件が起つるはず……」

「おい！ 聞こえてるだろ？ おい！」

突然、隣の教室から怒鳴り声が聞こえた。あそこは確か、ミステリ研究会だつたはずだよな。 後付設定。
ここじゃよく聞こえないので思い廊下に出る。他の部員三人も一緒だつた。

するとミステリ研究会部である内田が、ミステリ研部室のドアをどんどん叩いているではないか。そのそばには他のミステリ研の部員もそろつていた。といつても、内田以外には部員は鮎川、西村、山村の三人だけなんだがな。部員の少なさじやお約束研究会と肩を並べる……つてうちは正式な部じやなかつたな。

「おい！ 開けろ！ 開けてくれ、西村！」
「何があつたんだ？」

嫌な予感を感じつつも内田に尋ねる。いや、もうミステリ編なんだ、何が起つるかは明白だが。

「ああ、佐倉か……西村が部室に鍵をかけたまま眠つちまつたみたいでな。おれたち他の部員が中に入れないんだよ」

ドアの小窓を覗くと、西村が机に突つ伏して眠つてゐるよつに見えた。

「（）の教室の鍵なら職員室の前に置いてあるじゃないか。それを使えばいいだけだろ？」

と桐山が意見を述べた。「もつともだが、ここまでの前フリを考えるとそれは……

「見てみろ」

内田がドアの小窓を指差して言った。覗いてみると、案の定その鍵は教室内に転がっている。

ここまで読んで、かつミステリ編がどうのいつのたまつているんだ。どんなアホでもここからの展開くらい予想がつく。

「そもそも、どうして鍵をかけたのよ？ しかも教室の鍵を持ち込んでじゃって。あれは移動教室のときの『締りぐら』にしか使わないじゃない」

「おれに聞かないでくれ。西村は一体、何を考えているんだか……」

内田はうつむいたような顔で言った。おれは思った。こいつ馬鹿か。タイトルも読めないのか。何が起こっているかなんて猿でもわかるのだ。

「おー、ぶち破るだ

「えつ」

「えつ、じゃないだろ。本気で奴が眠っているだけだとでも思つていいのか？ わざと話を展開させたいんだ、お前もミステリ研の部員ならわかるだろ？」

さあ、と内田の顔から血の気が引く。やつとわかったか。

「そんな……まさか、そんなわけがない」

「恨むなら作者の無能さを恨むんだな。今はこの教室に入る事が先決だ」

ミステリ編突入のタイトル。そして“ティクスン・カー。ああ、作者はくたばれ。

お約束通りと書つべきか、おれと桐山と内田の三人の教室の扉に体当たりだ。三回ほど衝撃を与えた時点であつさりとドアは破れた。横開きのドアが何故体当たりで開くのだろうか。どうせ鍵がかかってたドアといえば体当たりのイメージしかなかつたんだろう、作者のアホには。

ドアを開けて中に入ると西村はやはり、机に突つ伏したまま死んでいた。あつさりしすぎでいると思うだろうが、こんな事はドアをぶち破るまでもない。教室に鍵がかかっていた時点である分かりなのだ。

「西村……おい、西村！ しつかりしろ！ 西村、西村
つ！」

内田が突つ伏している西村の肩をゆする。「ちょっとといいか。」と桐山が西村の生死を確認するもやはり死んでいるらしかった。桐山は万能キャラだからこつとうときに超便利。

「ねえ……本当に西村くんは死んでいるの？ 別に体はなんともな
くそうじやない……寝ているだけじゃないの？」

山村が絞り出すような涙声で桐山に訊いた。山村はミステリ研の紅一点で、綺麗な茶髪のミディアムの可愛らしい女子だった。割と軽い感じでモノローグをやっていたが、この子にとつては西村は同じ部員の仲間だったのだから悲しむのも当然だった。

「残念だけど心臓が止まっているんだ。死斑も少しだが出ている。
手があつさりと開いたから死後硬直はまだのようだが、……」

桐山の言葉を最後まで聞く前に彼女はそれまで堪えていたものが崩れるように泣き始めた。

隣にいた鮎川も言葉もなく立ち去るのみだった。おれらもそうだ。常時無表情な野上は知らないが、美並も陰鬱な表情をしている。胃の奥が冷たくなるような感覚に襲われていたのは、おれだけではなく桐山もそうに違いない。

ミステリ編が始まると、いつで覚悟はしていたが……やはり覚悟をすれば何とかなるはずでもない。冷たい胃の奥から寒気が広がっていき、体全体が凍りついたかのようにその場から動けなかつた。

ミステリ編、突入！（後書き）

もう1、2話ミステリ編続くと思います。

クローズドサークル（前書き）

ご無沙汰しました。

大変難産でした。

単純になまけていたという事もありますが、それ以上に難しい。

言うほど大したものではない）

携帯で見るとルビが変な事になります。

クローズドサークル

西村が死んだ。ミステリ編を始める、なんて言つた途端にこれだ。早速人が死にやがつた。

いくらなんでも悪ふざけがすぎるんじゃないのか、この作者でも……

面白半分でやつていい話じゃない事ぐらい分かつてはるはずだ。小説内とはいえ人ひとり死ぬ、なんて……普通に話を進めるのに飽きたからといってミステリ編にして学園内で殺人？ 酒落になつていな。

部屋の入り口付近で山村が泣き崩れている。鮎川は握り閉めた拳を打ち震わせている。おれと一緒に扉をぶち破つた彼は立ち尽くすのみだ。……と思ったのだが、こんな死体のある教室にいられなくなつたのか、外の空気を吸いたくなつたのか、乱暴に入つてきたドアを開けると部屋から出て行つてしまつた。

「で？」

おれは桐山に声をかけた。

「西村はどうやつて殺されているんだ？」

「ああ、それは多分……毒殺だな。」

「ふん。毒殺か」

「そこを見てみる。小瓶が転がつているだろ？。」

転がつてゐる小瓶を指紋を付けないように拾い上げた。

「これは……睡眠薬の瓶か？」

「そうだ。他に死体に外傷はないし……おそらくそれを大量に摂取

したか、もしくは“それ”にもつと強烈な毒物が塗られていたりしたか……だと思つ。」

本来普通のミステリなら、この状況はまず申し訳程度の自殺説が囁かれるれるシーンだと思つ。毒にしき睡眠薬しろ、わざわざ密室で殺す必要がないからだ。西村の睡眠薬に毒を仕込んだらそれでおしまいでいいじゃないか、密室にしてもメリットなんて何もない。という感じにだ。

でもそんな無駄な議論はされないだろつと思つていた。他殺と分かつてゐる事をあえて自殺説なんて出す労力も時間も無駄だ。わざわざ律儀に自殺説を持ち出してくれる人がこの食わせ物の中にいるだろうか。

「自殺じゃないのか」

そう思つていたものの、鮎川がやはり自殺説を持ち出した。ひねくれた考えを持つていない純粹な奴だと思つた。

「鮎川、お前なら“ヴァン・ダインの一十則”を知つてゐるだろつ」

そう言つと、鮎川は露骨に顔をしかめた。

「ああ……そういう事か」

「そうだ、第十八項は何だつた?」

鮎川は心底うそぞりした表情で答えた。

「事件の結末を事故死とか自殺で片付けてはいけない。こんな竜頭蛇尾は読者をペテンにかけるものだ。」……だつたか

「なんせお約束が大好きな作者だ。“一十則”なんてのは格好的

だろ？」

「やれやれ……」

つまり「いくら自殺じやないのか」と声高に叫んだといひでお約束好きな作者がそれを破るとは思えない、といつのが鮎川以外の面子の考え方だと思つ。

「おい、警察は呼んだのか」

「呼んだは呼んだが……すぐには来られないらしく」

「何故」

桐山が窓をじつと叩きながら、

「「」の天氣で、な。」と答えた。

窓の外を見ると吹雪だつた。一つの間にこんな天氣になつっていたんだろう。十一月だからおかしくはないが、それにしても……窓を開けて首を出す。凍えるような冷氣に襲われた。部屋の中から見るよりも吹雪は厳しいし雪は大きい。下を向くと関東とは思えないほどに雪が積もつていた。

おかしい。いくら十一月とはいえ関東でここまで天候になるとは。ここは四階だが、ここからでも分かる。一メートルは積もつてゐる。不自然にも程がある。

「寒いから窓、閉めてよ……」

「あ、悪い」

美並に言われて、慌てて窓を閉める。

「「」から警察署じや結構な距離があつたよな。この猛吹雪と積雪

じゃ千葉県警じゃ」ここまで来るのは相当困難だぞ……もしかすると
今日中には無理かもしねないそつだ」

鮎川が身震いしながら言つた。

*

とりあえず教師 ミステリ研究会の顧問 に事件があつた旨
を伝えた。警察が駄目でも教師には伝えておくべきであろう。「先
生、西村が死にました」と言つと冗談に付き合つよくな顔で「四月
莫迦は今日じやないぞ」と笑つていた。冗談じやないんだ、これが。
半ば強引に部室まで引つ張つていつて西村の死体を見せたときの
顧問といつたら、それはもうみつともないくらいの狼狽のしようだ
った。足は震え、冷や汗を流し、うろたえるにつるたえた拳句、職
員会議めいたものを始めるつもりらしい。

「今から俺は職員室に行つて他の先生方にもお知らせしていく。佐
倉、お前はもう帰れ。他の連中もだ」

「残念ですが、この吹雪じや電車も動いていないでしう
「そつか……そだな……じゃあせめて別教室で電車が動き始める
まで待機していくれ。ストーブ焚いていいから」

「そつします」

「ああ……あと、この事は出来るだけ他の生徒には知らせないでお
いてくれ。緘口令かんじゅうれいつてやつだ」

そう言つと足早に職員室にかけていった。

さて。作者がいかにゴミクズかは今までの話を読んでく
れた人は理解していると思うが、今回はひどい。ホントにひどい。

ふざけたおしている。

今は十一月。そしてここには関東、千葉県だ。そこに電車が止まるほどの猛吹雪、そして警察も来るのが遅れるほどの積雪。毎年のよううに異常気象と騒がれているのをいい事にこんなとつてつけたような展開にするとは思わなかつた。作者は単にこの状況をクローズドサークルものにしたかつただけじやないか。

なんせ関東の電車はよく雪が降る地方と違つて吹雪にでもなればスグに止まる。積雪に慣れていない地方の県警なら來るのも遅くでさる。……といつここのシチュエーションがやりたいがためにこんな異常気象を引き起こしたらしい。

思わず舌打ちが洩れた。いかにも作者らしさい陳腐なミステリ（笑）じやないか、くそつたれ。

そもそもクローズドサークスものにした理由がふざけてるんだ。おそらくは、警察組織の介入まで描写できる力がないと作者が自分でわかつてはいるからだ。それに登場人物に探偵役をやらせるには警察は邪魔だと考えたに違いない。そもそも警察がちゃんとに来てればこんな事件きつと一秒で解決するだらうなと思つていた。

おれはひとまず現場にいる美並、桐山、野上に、内田、鮎川、山村を隣の教室　　おれらの研究会の教室　　に集めた。職員室から借りてきた古臭い石油ストーブを焚くと、冷え切つた部屋の空気はどうあえずは暖まつた。

「ん、おかえり裕貴」

と、美並が缶コーヒーを渡してくれた。ありがたい。美並曰くおれが先生に知らせに行つていた間に野上が自販機で買つてくれたらしい。

熱い缶にかじかんだ手を当てがりながら、電車が動くまでの暇つぶしにでも　　といつ事で、件の談義を始めよつかと声をかけた。

「そうね。どうせ犯人はあたし達の中の誰かになるだろ？」「あたし達の中の誰かが事件を解決する事になりそうだものね……そうじゃないとお話にならない。クローズドサークルなら尚更ね」

美並が皮肉たっぷりに同意した。誰に対する皮肉かは言つまでもなく作者にだが。

そう、どうせ警察が来る前に事件は解決するストーリーにするつもりなんだろ？

「まず動機の線から洗つていった方がいいんじゃないかな？」

そう意見を述べたのは内田だった。

「基本だな。いくらこの中に犯人がいるとしても、おれらお約束研究会とそつちのミステリ研を合わせれば七人。動機のあるなしだけでも目安にはなる。」

「ちょっと待つて、あたし達も容疑者に入ってるの？」

と、美並が目を見開いていった。「当然だろ？」と内田と鮎川が声をそろえて返す。

「シリーズキャラクターなのよ！ あたし達の誰かが犯人なんて事になつたら……」

「いや待て、美並。作者もそろそろ潮時だ。ここらでおれらを犯人にしてBAD ENDにして完結させるつもりかも……」

「ふ。不吉な事言わないでよ……」

事実、作者はもう限界っぽいし……前回更新からどんだけ待たせるつもりだよ。

と、いつものようにメタネタでお茶を濁している場合ではない。

おれもあんな風には言つたが、本音を言えれば美並や桐山、野上を疑つてゐるわけではない。疑念のギの字もない。そんな可能性を検討するのもアホらしい。ただ便宜上公平を期さなければ奴らが納得しないような気がした。

「じゃあ、動機について検討するとしようか」

内田がそういった。

*

「動機……と言われてもね。そもそもおれと彼とはほとんど接点もないし。まあ多少は隣の部室同士つて事で仲良くはしてたけど」「同じだな、殺したい動機を持つほど距離は近しきはなかつた。」「わたしだつてないわよ！」「冗談じゃないわ、どうしてこんな事に……」

「落ち着けよ、山村。一応念のために全員に訊いてるだけだから……」

鮎川は？

「奴とは良好な友人関係を築いていたと思う。殺したいなんて、そんな……思うはずがない」

「あたしは桐山くんや裕貴と同じかな、そんな仲じやなかつた。静香は？」

「ない」

とまあこいついった感じで、そりやあ誰も「自分は彼を殺したいほど憎んでました」なんて言ひははずもなく、全員が動機はないと主張するもそれを証明するものも否定する材料もない。ないない尽くしだつた。

ならば各自思い当たる人の動機めいたものあげつらう事になるんだろうが やれやれ、これ以上殺伐とした雰囲気になるとか。とっくに空になつた缶に残る温もりをなんとなく手で感じつつ、そんな風に思つていた。

そもそも西村という男は敵を作るよつたタイプではなかつたよつに思えた。毒にも薬にもならないとは彼のためにあるよつた言葉で、誰に対しても一定の距離をとつて接してゐるよつた、そんな奴だつた。

そんなわけでおれも彼と親友だつたとかでもなく、一定の距離をとつてお互に必要以上に踏み入らない、それこそ“良好な”友人関係だつたのだ。

だから部が違つてお約束研はもちろんの事、ミステリ研にだつて殺したいと思うほどの強い敵意を持つた人間はいない、と断言できてしまつよつた氣すらした。

「いや、待てよ。」

沈黙を破つたのは桐山だつた。（とつても句点がある時点で読者にはわかるんだけど）

「どうした」

「こんな議論に意味があるのかな。」

「どういう意味だ」

「作者がやりたいのはつまりホワイダーヒットなのかフーダーヒットなのか、それともハウダーヒットなのか……って事だ。」

「……？」

「もしホワイダーヒットじゃなかつた場合、あのヘボ作者は果たして動機の部分まで真面目に考えるだらうか。」

ホワイダーヒット。つまり、“どうして殺したか?”の部

分だ。たしかに作者は見せ場じゃない場面を真面目に描写したりはしないし設定も真面目に考えないとんだボンクラだ。

ちなみにフーダーットは“誰が殺したか？”・ハウダーットは“どうやって殺したか？”が主題になってくる。どうも密室を登場させたあたりハウダーットらしい気はする。

要するに彼は存在するかもわからない動機を探すより、他の糸口から犯人を捜そうといふらしい。その方が犯人を突き止めるには賢明だろう。誰にも動機なんてありませんでしたじゃそこで行き止まりになる。

こんな風に作者の性能まで考慮に入れなければならない推理とは、やりやすいんだか、やりにくいんだか と思つてゐるに違いない。が、おれも一応口を挟ませてもらおつ。

「ちょっと待つてくれないか」

「どうした。」

「作者はたしかに究極のダメ作家で、何をするにも自己満足で終わらせるような最低野郎かもしれないが……いくらなんでも動機くらいは考えるんじゃないか」

「えー、そうかなあ？」

美並が口を尖らせる。

「作者には作者なりのプライドってのはきっとあるさ。動機もなく殺人なんていくらなんでも」

「やけに作者の肩を持つじゃないか。」

「考へてもみる。密室のトリックを考えると、それらしい殺人の動機を考えるのだったら、どっちが簡単か」

「言われてみればたしかに簡単なのは動機の方かも」

美並はもう納得いったような顔をしてゐる。

「最悪動機なんて、『ハンガーを投げつけられたから』とかにしちやえは、たとえ嵐のような非難がきてもとぼけられる。密室トリックはそうはいかないだろ。むしろ動機の方を一生懸命考えている気がするんだ、おれには」

「お前がそこまで言うんだつたら動機の線についてもう少し考えてみるか」

そう同意してくれたのは鮎川だ。彼はこんな事件が起きても比較的終始冷静で助かるなと思った。

他のメンバーもそれに合わせるようにまた動機の線について考えてくれた。

「…………」

二点リーダの連続を見るだけでわかる。野上があれの方を食い入るよつた無表情で見つめている。

何か言いたい事でもあるんだろうか。

「…………」

無表情の彼女にしては珍しく、わずかに眉をひそめると、またその表情は虚空を眺め始めた。

自分の手を見つめると、ストーブで空気は乾燥しきつてこはるはずなのに、じつとりと汗ばんでいた。

もしや野上は真相に気がついたのだろうか。だとしたら黙つてしないで喋ればいいのに、これが無口無表情キャラの宿命なのだろうか。

なんにせよ野上には要注意だな。彼女はあれで全てを知っているのに言葉に出すのが苦手なだけなのかもしれないのだから。

そう思いながら、おれ達は動機についての談義を再開した。

クローズドサークル（後書き）

もう分かる人には犯人わかるかもしれません。それほどあからさま（？）です。

竜頭蛇尾でアンフロアでガツカリなオチ（前書き）

例によつて携帯で見るとルビがおかしくなります。
もし楽しみにしてくれてた方がいたらこんなオチで申し訳ない。

竜頭蛇尾でアンフォニアでガツカリなオチ

それからしばらくの間、西村京次郎殺人事件（命名おれ）の動機談義は続いた。

たしかに作者は動機くらい考へてるだらう的な事にはなつたが、果たして本当に眞面目に考へてるんだろうな。

「何か思ひ当たる事はないのか、何でもいいんだ」

そういうと、内田が「そういえば……」と呟いた。

「何か思ひ出したのかい。」

「うちの研究会ではそれぞれの会員にノマステリ小説を書かせて会誌をつくりしているんだが……」

そういうえばそんな話を耳にしたような気がする。

「もしかして、西村の書いた小説が誰かの盗作だつたとか、とんでもない駄作で会誌の足を引っ張つたとか、そういう話か？」

と、適当に思ひついた考へを述べてみる。そんな理由で殺されたらたまたもんじやないが、この作者ならやりかねないような気がした。内田はゆるゆると首を振り、「そうじやない」と答えた。ちょっと安心した。

「逆なんだよ。西村の小説は……傑作だつたんだ。プロ顔負け、いやそこらのプロ作家なんて田じやない内容だつた。それこそこの小説なんかとは比べ物にならないくらいのね」

「凄いね！ そんな人だつたんだ、西村くんつて！」

そう言つて美並が手を打つた。それなら殺される理由もないはずではないか。

「こんな無茶苦茶な動機はありえないと思うが、ひょっとしてその小説の出来に嫉妬して……とかじゃないか」

内田はおそるおそるといった感じで述べた。まあ、ありえない話じゃないと思う。それならうちの部員は全員除外できるつていう自分に都合の良い理由もあるが、そもそも作者が考える動機がどんなに不条理だつておかしくないという事に気がついた。

問題はミステリ研の方だが、内田は……果たして自分に不利になるかもしれない動機をわざわざ言うだろつか。なにせその“動機”は自分にも当てはまつてしまうのだから。

では鮎川、山村はどうだ？ ありえない話ではない。犯人はこの二人のうちのどちらかなのだろうか。

それとも、おれたちの疑いの田を承知で内田はこの意見を持ち出したのだろうか。わからない。

おれは飲み終えた缶をゴミ箱に投げ入れると、その足で窓の外の様子を見た。

相変わらず関東とは思えないほどの猛吹雪は収まる気配すらない。激しい横殴りの大雪が窓に叩きつけられる。ここまで無理矢理なクローズドサークルが他にあるだろうか。

考へても犯人なんてわかりそうもなく、うんざりした。クローズドサークルになつた目的は、いとも違和感なく容易く、警察を差し置いて素人であるおれたちが真相を突き止める探偵役に甘んじる事が出来るからだろう。警察が介入しつつもおれたちが名探偵になるのは無理があるからな。

それにしても、なんのだろ、このやる気の入らなさは。イマイチ本腰を入れて推理をする気になれない。理由はおよそ見当がつ

いているが。

おそらくは、このクローズドサークルはおれたち以外にも人がいる学校内で起きた殺人だから、そして「一人目が殺されていないからだ。例えばこれが、山奥の山荘に集まつた八人のうち二人が殺されたら？」

そうなれば誰だつて目の色えて推理するさ、何せ自分も殺される可能性があるのでだから。そう、クローズドサークルの醍醐味は“自分も殺されるかもしれない恐怖”だろう。アガサ・クリスティの「そして誰もいなくなつた」然り、皆殺しの恐怖の身を切るような緊張感の中、じだいに明らかになつていく真相。これがいい。

それに比べてこつちはおれら以外にも学校に残つている人は大勢いて、一人殺されただけだから“次は自分かも”という恐怖もない。作者がやりたかったのはおれらの退路を断つ事と警察の介入を防ぎたかっただけ。激しく萎える。

そもそも電車が動いていないというだけでこの空間が閉鎖されているわけじゃない。美並なんて一駅離れてるだけだから歩いて帰ろうと思えすれば帰れる。

「やっぱり密室トリックを考えましょよ。作者のトリックなんてどうせ噴飯ものの陳腐で簡単なもんに決まつてるのよ。その方面から推理した方が確実じゃない？」

そう意見を述べたのは美並だった。たしかに動機からでは犯人なんてわかる気がしない。

といつても密室からならわかる気がする、というわけではないが

……

「そうだな。ずっと動機動機じや、頭が働かない。別の方向から見てみれば何かわかるかもしない。」

「決まりね！ じゃあ、密室の謎を解明しましょー。」

美並ときたら、心なしか楽しそうじゃないか。まあたしかに「密室の謎」って響きはいいが……人がひとり死んでる事を忘れるなよ。

「…………」

「ういえ野上は冒頭でティクスン・カーを読んでいたな。もしかしてこのトリックが肝になるのか？」

半信半疑でそんな事を思いながらも、いつのまにか議論の方向は密室にシフトしていく。やや行き当たりばったり感が否めないがこの面子じゃどうしようもなさそうだ。

「そもそも」と内田が切り出した。

「どうして睡眠薬で殺されて密室にされたかだよな」

「そり、密室の事を考えるとまたその問題に戻る事になる。無難に考へるなら自殺に見せかけたかった……といつとこだらつが、わざわざ密室にして服毒自殺をする奴つてのもねえ……。」

それにヴァン・ダインの一十則にもある通り、自殺で事件の幕が下りるのはタブーであるからして、つまり実際そうだったように誰も自殺だなんて思ってはくれない。それとも犯人は本気で自殺に見せかけられると思ったのだろうか。

「そこを考えてるといつまでも先に進めそうにない。その問題はひとまず置いておこう。深い意味などないのかもしれないしな。」

「そうだな、まあ十中八九自殺に見せかけたかったんだろう。おれらが“二十則”に従つて推理を進めるようなひねくれものだとは思わなかつたつてところじやないか」

内田がそう同意したのに成程と思つたものの彼自身犯人じゃないという保証がない以上あまり鵜呑みにするのもまずいだろう。

「ふうん。でも、教室のドアの鍵はあれしかなかつたの？」

「という美並の問いに、鮎川が「合鍵という意味ならぬが、マスターキーが職員室にあつたはずだ」と応えた。

「それなら話は簡単じやない。犯人は西村くんを毒殺した後その教室の鍵を中に置いて、マスターキーを使ってドアを施錠したつてだけの話でしょ？」

「流石にここまで簡単な話じやない」

「言いながら首を横に振ると、美並はがつくりと肩を落としながらも「でしじうね」と応えた。

「先生に言つに行つたときに訊いておいたさ。マスターキーはここ最近は一度足りりとも職員室から動いていないとの事だ」

「そう……」

「まあそつ氣を落とすなよ。そこまで作者も馬鹿なオチにはしないだろうし。」

「いや、さうとも限らないよ、とはあえて言わなかつた。もしかしてもつと馬鹿なオチかもしれないのだからマスターキー オチの方がまだしもマシだったのかもしれない。

「もうひとつ可能性といえば……」と山村が遠慮がちに呴いた。さつきまでの彼女の様子を見る限りはとても議論に参加する余裕はなさそうだったのだが、どうやら大分落ち着いてきたらしい。それでも彼女の声に普段の張りはなかつた。もっとも、それ 자체が全て

彼女の演技で山村が真犯人という可能性もないわけではない。

「施錠した後に何らかの方法で鍵を教室内に入れた、とかじゃないかしら」

「何らかの方法ねえ」

山村は「例えばそうね……」と言つてじばらく首を傾げ、

「教室のドアの隙間に入れたとか……かな」

「ドアの隙間?」

「うん。ほら、あの横開きのドアつて一枚あるでしょう。教室の内側と外側の溝にそれぞれドアがあって、一枚の間には隙間があるじゃない。教室の鍵くらいならそこから投げ入れられると思うのよね」「あ、ナルホド! たしかに、あの鍵つてちつちゅいし、平べつたいもの」

「いや。」

桐山が異を唱えた。

「残念だが、鍵は教室の中央、それも机の上にあった。

教室のドアの隙間から鍵を投げ入れたとしたら鍵はドアの近辺になければおかしい。仮に遠くへ投げる事が出来たとしても壁際にあるはずだ。だが鍵は教室の真ん中、それも机の上。ドアの隙間からじやとても無理だろ。」

「ああ、そう……そりいえば、真ん中らへんにあつたわね」

山本も最初からそこまで期待して言つたわけじゃないのか、あつさつと自分の説を捨てた。

「……窓」

「えつ？」

野上が急に重い口を開いたので驚いて思わず素つ頓狂な声を上げてしまつた。

「窓の鍵、閉まつてた？」

野上が質問を繰り返した。おれは思わず窓の方へ目をやつていた。

*

「ああ、考えてみればあのときは確認するのを忘れていたな、迂闊だった。お前は窓を開けて外の天気を見てたろ？、鍵はかかっていたのか？」

鮎川が野上の質問の意味を補足するかのように問つた。それに応えようとするおれを野上がまた感情のこもつていらない目で食い入るように見てくる。無表情ながらも血も凍るような迫力を感じる。

「ああ、窓の鍵ね。閉まつてたよ、もちろん。開いていたら言つてるつて」

たしかに窓の鍵がかかつてゐるかどうか知つてゐるのはおれだけだ。他の誰が確かめる間もなく、おれが窓を開けてしまつたのだから。

「でもな、野上。たとえ鍵が開いていたとしてもここは四階だ。落ちたらただじや済まない。いくら何でもここから飛び降りようだな

んて思わないだろう、犯人でも。少なくとも、ここにいる人間の中には怪我を負つているような人は、いない

「…………」

いくらなんでも密室の謎の答えは、“犯人は窓から飛び降りたのです！”じゃ、ミステリファンに死ぬほど石を投げつけられるだろう。今まであつたどの説よりもひどい回答だ、これは。

「…………」

野上の刺すような目線は依然おれを捉えたままだ。一体何が納得いかないんだ、野上は？

「…………」「？」

「え？」

「本当に窓の鍵は閉まっていた？」

「ああ……もちろん本当だとも。どうして嘘をつく必要があるのかな」

なぜ彼女はそこまでしてそんなところにこだわるのだろうか。また手汗がじつとじつと滲んでくる。

「犯人は窓から飛び降りたから」

野上が抑揚の無い声で言い放つた。彼女の氷のように冷たいアルトが不気味な程によく響いた。

「さつさとも言つただろ？　四階から飛び降りる馬鹿が、どうに……」

「…………雪」

「はつ？」

「ゆき」

「……雪がどうしたつて？」

平生の態度を努めたが声がかすれてしまった。

「そつか！ 雪ね、忘れてた！」

手を叩いて言つたのは美並だった。

「そうよ、今日は一メートルも雪が積もてるじゃない。そんだけ積もつてれば四階からだらうが、クッショնになるから飛び降りも……」

「待て、待つてくれよ、いくらなんでも、それは」

「ううん、だつてこれ以外に犯人が密室から出る方法なんてなさそうじやないの」

「四階だぞ、ここは。いくら雪が積もつていたからつて一メートルぼつちじや、大したクッショնにもならないし、怪我もするだらう」

乾いた唇を舐めながら、おれは必死に飛び降り説を否定した。

「この高さだ、たつた一メートル雪が積もつていたからなんだ。飛び降りる馬鹿がいるわけ……」

「そつかな」

言い切る前におれの発言は遮られた。

「お前は何か勘違いしてるな。確かにここは四階だよ。でもこの学校は坂の上に建つてあるんだぞ、忘れたのか？ つまりここから窓の下までの高さはせいぜい三階ほどしかない」

「それなら一メートルも積もつてれば平気じやない？ ねえ？」

おれはそれには答へず「どうせひしろ窓には鍵がかかつっていたのだから同じ事だ」と、にべもなく吐き捨てた。

「だからこそ本当に窓の鍵が閉まっていたかどうかが問題なんだ。もう一度訊く、窓の鍵は確かに閉まっていたのか？」

「おれが嘘をついたと言つのか」

おれは彼をねめつけたが逆にこちらを憐れむように肩をすくめただけでのれんに腕押しであった。

「質問に答える、鍵は閉まっていたか？」

「何度も言わせるなよ。閉まっていたって言つてるだらうー。」

「やれやれ。やはりお前が犯人だつたのか」

さつさ缶コーヒーを飲んだばかりだといふのに急激に口の中が渴いていくような感覚に襲われる。

おれが犯人だつて？

「冗談だろ」

おれはぶつきらぼうにそう返した。彼は軽くため息をつくと、

「冗談でこんな事は言わない」

「冗談にしか聞こえないね。どうしておれが犯人だと？」

「お前は自分に降りかかるんとする火の粉を恐れるあまり、そらに大きなミスを犯したんだよ」

「何の事かわからんね。おれはただ窓の鍵はたしかに閉まっていたと言つただけだ」

「そこだよ」

「一体」いつは何を言い出そつといつんだ。おれが何か言つたのか。

「残念だが、この教室の窓は鍵が壊れていて閉まらないんだよ」「えつ……」

おれは思わず窓にかけよつていた。鍵を確かめると確かに鍵は壊れていて、どうやつても鍵をかける事が出来なかつた。ストーブはきいているはずだつたが、背筋は凍るように冷たかつた。

「知つていたのか、お前は……鍵の事を、最初から……」

「おれはついたさつさむ。でも、野上は最初から気がついていたと思うね」

そう言われても野上は相変わらず能面のよつな表情を変える事はなかつた。

「そうや、確かにあれは嘘をついていたよ。でもそれは密室のトリックが“窓から飛び降りた”なんてあまりにも陳腐で情けないオチになるのが嫌だつただけだ。おれが犯人だつて？ そんな事があるはずないだろう」「

すでに迷れられる望みは薄い氣はする。

「おれを犯人呼ばわりしたかつたら証拠を持つてこい」

「おれだつて今の嘘でお前が犯人だと断定するつもりはないんだ。でも、お前がそこまでして飛び降り説を否定しようとするつて事は、すなわちお前が窓から飛び降りた事を証明する証拠を残していると、いう可能性は高いとみていいんじゃないかと思つてな」

「やつ想ひのなら出してみる」

頭に鈍い痛みを感じる。灯油臭いストーブがずっとと点けっぱなし
だからという理由だけではない事は明白だった。もうおれは落城寸
前なのだ。ここまで追い詰められて探偵の追及を逃れた犯人をおれ
は知らなかつた。

「お前の体操着を見せてみる」

もういっ……

「飛び降りて、雪がクツ シヨンとなつて怪我は免れたとして、それ
によつて服が濡れてしまつ事は防げないだろつ。けれど、お前の制
服が濡れている様子はない」

ああ……

「もし何か別の事情で濡れていたんだつたら納得のいく説明をして
くれよ?」

もはやそんな気分にはなれなかつた。全てがどうでもよかつた。
おれは西村に復讐できただけで十分だ。

彼が不慮の自転車事故で妹の足を奪つた事は許しがたい事だつた。
本当は西村に悪気がない事も、落ち度がない事もわかつていた。飛
び出した妹が悪い事は承知していた。
それでもおれは……おれは……

「おい、内田、聞こえてるか?」

佐倉裕貴はそう言って、意氣消沈としたおれの様子を伺つた。

*

まず最初に一喝させてくれ。ひでえオチだと。そしてこのオチに持つてくるまでのプロセスがあまりにも雑だ、手抜きだ。こんなふざけたおしたもんがミステリなんて……

「認めるよ」

内田が生氣のこもつていらない声でそう言った。正直な話、追い詰めたのはおれだがそんなにあつさり認めてしまつていいのかと言いたい。

「おれが……おれが、西村を殺したんだ」

内田が搾り出すように言った。

まだ容疑者のアリバイがどうとか（せつかく桐山が大体の死亡推定時刻の見当までつけてくれたのにだ）、凶器の毒薬は結局何だったのかとか、いくらでも考えるべき点は残っていたはずなのに。作者が飽きちゃったんだろうな。死ね。

「動機は結局なんだつたんだ。」

動機が分からぬまま物語が終わっても後味悪いから出来れば教えて欲しいんだが。

「やつぱり会誌の事か？ 会誌の出来に、嫉妬して……」

「やうじやない」

内田はまゆるむると首を振ると

「会誌は関係ないんだ。関係ないからおれはその動機の事を持ち出したんだ」

「じゃあ、どうして……」

「それは……いや、もう、どうでもいい事だ」

内田は投げやりにうつ面うつとがっくつと頃垂れる。

「彼の命を奪つた毒薬はストリキーネ。科学部に友だちがいてね。そいつがたつた六回の工程でストリキーネを合成してみせると最近意気揚々としてたもんだから記念にもらつたんだ。奴も中々危ないとは思つけどな。思えばそいつがそんな馬鹿な事を言い出しさえしなければおれの中の悪意は爆発する事はなかつたのかもしれない。おれはそれをただ、食堂で買つてきたパンに入れて食わせただけ。ほら、お前の分も買つてきてやつたぞ、食えよ、ってな。ミステリみたいにすぐに効果が現れなくてヒヤヒヤしたが、ちゃんと教室で死んでくれてホッとしたよ。

後は同じ毒薬を塗つた睡眠薬の瓶を置いて、密室を作つて窓から飛び降りただけだ。もちろん体操着は着てたけどな。誰にも見られなくてよかつたよ」

「わざわざ拾いきれなかつた謎を教えてくれてどうも」

「こんな投げやりなまとめ方もないと思つがな」

白嘲氣味にそつ言つと「もう雪も止みそうだ」と呟いた。

警察が来るのはもう時間の問題だらつ、彼は白首するやつだ。
応解決つて事でいいのかな。
しかしひでえオチだ。

生意気に叙述トリックもどきをまでやうつするなんて作者には十
年早いと言いたいね。

そう、妙に不自然に「*」で区切るなと思っていた事だろう。そ
れも区切るようなタイミングではないところでばかり区切つて
いたような気がする。しかしそれはおれと彼の視点が「*」とに切り
替わっていたのだ。

前回の最初の視点が彼、次がおれ。といった感じに、前回から内
田　おれ　内田　おれ　内田　今ここつてね。まあ、ある程度叙述
トリック慣れしていれば前回を読んだだけで見抜けただろう。
いや叙述トリックと言えるのかどうかは怪しい。こんなのはただ
のペテンだとおれは思うよ。

そもそも今まではずつとこのおれの一人称一視点固定だつたじや
ないか。それをいきなり真犯人の視点で始められても読者にあまり
にもアンフェアだ。そうだろ？　もうウンザリだ、こんなふざけた
事に巻き込まれるのは。

もつとちゃんとした、読者が素直に「やられた！」と思う叙述ト
リックならまだしも、こんなお粗末な手段でしか意表をつけないよ
うじや作者にミステリは百年早い。それが分かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8265w/>

お約束研究会

2011年11月27日12時47分発行